

盗用疑惑 時代が許さず

五輪エンブレム問題

崇城大芸術学部教授

岩上孝二さん

2020年東京五輪の大会エンブレムは、作者の佐野研二郎氏が「模倣や盗作ではない」と主張する中、本人の申し出で異例の白紙撤回となった。崇城大芸術学部の岩上孝二教授(64)に騒動の受け止めやデザインにおけるオリジナリティについて聞いた。

(福井一基)

「一連の騒動をどう受け止めますか。」

「ベルギーの劇場ロゴとの類似が指摘されているが、造形を突き詰めていけば結果として類似はあり得るし、問題ない。ただ、佐野氏は過去の作品でも盗用が指摘され、デザイナーとしての資質に疑いを持たれた。エンブレムとほかの作品は別問題だが、時代が許さない。五輪エンブレムは世界から注目される

だけに、白紙撤回はやむを得ない」

「佐野氏は盗用を否定しています。」

「デザインは単純化するほど似通ったものが出てくる。情報化が進んだこの時代に、全くゼロからのオリジナリティというのは不可能に近い。過去に見たものが記憶に残り、自分のアイデアと思い込んでしまうこともある。アレンジを重ねた上で、作品をオリジナルとするかどうかは制作者自身が判断しなければならぬ」

「どうすれば今回のような事態を防げますか。」

「著作権のすべてを検索することは難しいが、似通ったものがないかきちんと確認して出さ

なければ、プロとは言えない時代になった。世界的企業の場合、企業ロゴを長期間告示して、問題がなければ登録するなどの措置を取っている現状もある」

「大会組織委の選考過程に問題はありませんでしたか。」

「応募資格を世界的な賞の受賞者に限定したのは問題なく、もっと絞ってもよかったくらいだ。次は公募というが、プロとしては違和感がある。今回の応募作品の範囲で選ぶべきだ。ただ、佐野氏の原案に修正が入ったのはお粗末だった。あの時点で審査をやり直すべきだった」

「デザインはどうあるべきですか。」

「誰のため、何のため、誰にどうつながるかのシステムとしての『デザイン思考』が問われている。今回のエンブレムは単に作った『作品主義的』な印象を受ける。東京五輪のコンセプトを時代とともにどう表現するのか。それが問われている」



◇いわがみ・こうじ
地域ブランドデザイン研究所(熊本市中央区)代表。日本グラフィックデザイナー協会本部運営委員。同協会新人賞、熊日広告賞グランプリなど受賞多数。八代市出身。



インタビュー